古典」という語に思うこと

短期大学部教授　河合　忠信

常日頃古い書物を調べたり、その面(つら)をながめて暮らすことが多いせいでもあろう、「古典」という語になにかひっかかるものを感じる。「古典芸能」、「古典音楽」等々、やたらにこの「古典」なる言葉が眼につく。因みに広辞苑の「こてん〔古典〕」の項をみると、(1)〔左伝、文公十五年〕昔の典型・儀式または法式。(2) 昔の書物。昔の経典。転じて永く残るべき価値の定まった書。(3)(classics) 二世紀以来、古代ギリシャ及びローマの代表的著述、後には広く、学芸上の大家の著述や巨匠の作品などで、後人の以て模範・典型となすべきものをさす。と書いてある。つまり、私がひっかかるのはここでの(2)と(3)の関連である。すなわち、西欧の言葉、例えば英語のclassics, classic の訳語として「古典」なる語をとりいれたことである。勿論、書物に関しては何ら異論はないのだが、「古典音楽」とか「古典芸能」などと書かれるとどうも気にかかる。(3)でのclassics、またclassic なる語は、私なりの解釈だが、class (優等級を与える) なる語からの派生語で、〔classifyされたもの〕,すなわち〔永く残るべき価値の定まったもののクラスに入れられたもの〕を指すわけで、これを書物にのみ限って「古典」なる訳語をあてるのには異論はないが、書物以外の分野にまで、このclassics, classic なる語の訳語として使用するのには何か場違いな気がしてならぬのは私だけだろうか。

Classics, classic の訳語としての、この「古典」なる語が日本語の語彙組織の中で正当な地位を確保し、一人歩きを始めてすでに久しく、今日それは本来の垣根をこえてその表現内容を広げてしまったようである。でもやはり私は、「古典」なる語は書物の世界にのみ使用されるべきであり、それも、「いにしえの書(ふみ)」というより、「人類の心の糧として、永くのこるべき価値の定まった書物」に冠すべきものと思っている。

(図書館稀覯書室兼務)